『北海道・洞爺湖・有珠山・昭和新山方面３泊４日の旅』色染昭和 35 年卒　山田英二

～洞爺湖有珠火山マイスターと阿武山地震観測所サポーターとの交流会に参加～

§１．はじめに：北海道には、昔、会社 OB 会の親睦旅行で、摩周湖・知床半島方面に２泊３日で行ったことがあるが、洞爺湖周辺の旅は今回が初体験であった。

今から 11 万年前、巨大な噴火により洞爺湖が生まれた。この洞爺湖の南側直ぐ近くに有珠山がある。有珠山は約２万年前に洞爺湖の南岸で噴火によって誕生した活火山であるが、7～8 千年前に山体崩壊を起こし、その後暫く噴火がなかったようである。江戸時代に活動を再開し、1663 年から 2000 年までに９回噴火を繰り返しているという。

近年、20～30 年おきに噴火を繰り返している有珠山周辺の伊達市、豊浦町、壮瞥町、洞爺湖町の１市３町は「火山との共生」が大きなテーマになっている。次の噴火に備えて、そこに暮らす人々が、火山の特性を正しく理解し、災害を軽減する知恵や噴火の記憶を伝承していくことはとても大切な事である。この「学びと伝承の実践者」を育成する仕組みとして地域限定の「洞爺湖有珠火山マイスター」制度が発足した。洞爺湖有珠山の特性や自然を正しく理解し、伝える事が出来る人を「火山マイスター」に認定し、地域防災力の向上を図ると共に、地域の魅力発信の担い手になって活動して貰う制度である。

昨年、この洞爺湖有珠火山マイスターの方々が、阿武山地震観測所のサポーター活動を視察に来られた。火山噴火には地震を伴う事が多く、地震と防災に関する阿武山サポーター活動を学ぶための交流会が開催されたのである。

今年は、その返礼のような形で、マイスターとサポーターの交流会が洞爺湖有珠山で行われることになった。阿武山サポーターがマイスター活動を実地で学ぶと共に、阿武山で使用している満点地震計を有珠山周辺に設置したり、シンポジュームに参加する為である。

★行程：2025 年７月６日～9 日、三泊四日、旅館 ゆとりろ洞爺湖

第１日目：伊丹空港８：00 発、新千歳空港 10：00 着。レンタカーで有珠山へ移動。
有珠山ロープウェイにて展望台へ。地震計２台仮設置。

第２日目：午前中は仮設置した地震計からカードを回収、波形読み取り。
午後は北海道洞爺湖サミット記念館にてシンポジューム。

第３日目：午前中は地震計３台設置。午後は、マイスターさんに設置して頂く地震計２台の点検整備と、予備地震計の発送準備。

第４日目：午前中、昭和新山の中腹（特別エリア）まで登山。そのあと、三松正夫記念館を見学。新千歳空港 16：10 発（ギリギリ間に合う）、伊丹空港 18：00 着。

以上の通りスケジュールは充実しており遊んでいる暇はなかった。阿武山サポーターの参加者は６名。専門家の先生方は右記３名が参加された。NPO 法人理事長・飯尾能久先生、
京大防災研教授・矢守克也先生、山梨県富士山科学研究所・岡田夏美先生

§２．洞爺湖有珠火山マイスターの現状：

⑴現在、マイスターは 64 名在籍している。

⑵毎年 10 名前後受験生が居り、その年にもよるが、合格率は 50%程度、３回受験して合格した人もいる。

⑶マイスターの試験内容：実技（有珠山、昭和新山のガイド）とレポート。

⑷マイスター試験の審査員：岡田弘先生、大学教授、行政の課長など５名で構成。

⑸マイスターの募集方法：洞爺湖や有珠山関連の勉強会などに来られた人の中に「マイスターに関心があるらしい」という人の情報が伝わってくる。自然に声かけて、誘う、というよりは気が付いたらマイスターの受験の申し込みをしていたと言う感じの自然さで勧誘。

⑹ 有珠山ロープウェイにはガイドの申し込みが毎日のように入ってくる。このガイドを引き受けたマイスターはロープウェイに出勤する。人数はその日によって違うが、５人の日もあれば多いと１０人以上のときもある。ＮＰＯ法人洞爺湖有珠火山マイスターネットワークあてに依頼が来るパターンもある。これは地元の学校などの防災教育のときもあれば北海道外からの修学旅行を案内するというのもある。

⑺マイスターの養成講座：養成講座は毎年２回、一般の人を対象に行っている。他に有志が希望者に対して少人数で行っている（有志の自主学習会）。
マイスターを対象とする勉強会や研修会も年２回行っている。

⑻マイスターの活動費用：NPO 会員の年会費 3,000 円/年が基本。補助金等が入る年度もあればない年度もある。ガイド料はマイスター一人につき 20 人を限度として受け持ち、おおむね 8,000 円。地元の住民グループ、学校、保育所などへは基本的には無料。
交通費の実費のみマイスターに支払われる。

⑼マイスターの構成：年齢は 90 才から 20 才。64 人中 28 人が女性。リタイアした人は 16 人（∴現役 48 人、若い人が多い！）。特徴的な点は、洞爺湖町役場の職員（課長、課長補佐）が居て、行政との仲介役を担っている点である。

（10）マイスター間のコミュニケーション：
ガイド、身障者、子育て、ペット愛好家などの分科会があってラインで常に連絡しあっている。会議室で月１回程度、対面会合している。
全員が集まる総会は年１回、その他研修会は前記の通り。

§３．有珠火山マイスターさん達の活動全般について（個人的感想）：

マイスターさん達の活動（ガイド）を見聞して感じた事は下記の通り。

⑴全般的に言えることは、エネルギッシュ、迫力性、情熱性、芸術性、創造性を感じた。

⑵言葉が明晰で、声も大きく、説明に強い熱意を感じるので、小生の様な耳の悪い人間でも、引き込まれ、聞き入ってしまう。

⑶大きな名札に自分自身の似顔絵が描いてあったりするので、親しみやすく感じる。

⑷人形劇ならぬ人間劇による火山噴火の説明があったが、上手下手の問題は別として、何とかして理解して貰おうとする創意工夫と訴求力を感じた。

以上の通り、サポーター個人としてはマイスターさんに見習う事が多いと感じた。

§４．洞爺湖有珠火山マイスター関係者は多士済々！

阿武山サポーター関係者（先生方を含めて）多士済々であると日頃思っていたが、今回お会いしたマイスター関係者は、何か特別な才能を持っておられる方が多いと思った。今回情報交換できたマイスター関係者についてネットで経歴等を調査した事を下記します。宇井先生と岡田弘先生は指導的立場にある先生方で、C さん～I さんはマイスターとして活動している方々です。

⑴宇井忠英先生：
1940 年生、東京大学理学部博士課程卒、理博、北海道大学名誉教授、
「NPO 法人・環境防災総合政策研究機構　理事」　【専門】「火山地質学」「火山防災」

著書に「火山噴火と災害」東大出版会 1997,「洞爺湖有珠山ジオパークガイド・01，02，03，04，05」等、著書、論文多数（100 件以上）。
小中校児童向け出前授業（例「火山活動による大地の変化」）、実験、野外観察会を実施中。
一般向け防災講演、出前講座（例「関西地方に迫りくる地震ーその仕組みと備えー」）、及び学会講演等を実施中。
　まったくの素人にもわかるように心を砕いてお話をしてくださり、尊敬されている由である。関西にお住いの宇井先生には是非、いつか阿武山で講演をお願いしたらどうかと思った。

⑵岡田弘先生：
　北海道大学理学部卒、理博、環境防災総合政策研究機構　理事、長野県出身。
【専門】「火山物理学」「火山噴火予知」「火山災害」
2000 年有珠山噴火を的確に予想した事から「有珠山の主治医」と評された。
有珠山の防災活動や、住民への啓発活動、自治体との連携活動等の功績により、
「北海道新聞文化賞特別賞」及び「防災功労者内閣総理大臣賞」を受賞（2001）
著書に「有珠山火の山とともに」北海道新聞社（2008）
「有珠山・その変動と災害」北海道大学出版会（1988）等がある。

⑶C さん：
　室蘭出身の生物学者。2003 年神奈川から壮瞥町に移住、2008 年マイスター1 期生に認定。家族ぐるみ（先生とご子息とその奥様三人）のマイスター一家である。
　【C の不思議な世界】と題するエッセイが HP にあり、2011 年「温泉の化石」と題する第 1 回目の投稿に始まり、2023 年「あやしき光あり」の第 1,143 回目の投稿まで、千回を超えるエッセイの寄稿があり、その卓越した文才に驚かされる。
【C 先生の抱負】『洞爺湖や有珠山の驚異の魅力を「自然」「エネルギー」「防災」などの観点から発信、「笑顔とジオパーク」という課題を密かに掲げて実践、野外で動きながら楽しんで貰うことの難しさ、大自然と、そこに向き合う人々との中に笑顔と深い感動が漂う事を願い、その橋渡し役を担いたい』とのＣ先生の抱負を読んで、正にシチズンサイエンスを実践しておられる方ではないかと感じた。

⑷D さん：
北海道大学　精密工学科卒、キャノン㈱にて複写機やファクシミリの開発に従事、2007 年　定年退職を機に横浜から伊達市へ移住。マイスターネットワークの代表を勤めた事がある。
画才、文才に優れ、エッセイをまとめた著書**【また、春を待つ】**（下記）がある。
★D さん著**【また、春を待つ】**（2024 年 11 月 30 日発行、A4、214 頁）を読んだ感想：
D さんの著書を読んで感銘を受けたので 3 つの側面（a）文、（b）絵、（c）詩から感想を述べてみたい。

（a）文：この本は 51 編のエッセイから成り立っており、国内外旅行のこと、各地ジオパークのこと、裁判員裁判のこと、北海道の列車たち、音楽の事の他、有名作家・画家、司馬遼太郎、安野光雅、城山三郎、新田次郎、高橋睦郎等が引用された文や絵があって、幅広いジャンルについての論考は濃密で読み応えがあり、且つ、面白い本であると思った。
　しかし、何といっても地震や噴火や三松正夫について論じた項、【稲むらの火】【紋別製糖所】

【胆振線物語】【有珠外輪山の牧場】【噴火は地球の内部を探る窓】【三松正夫さんの絵】については特別興味深く拝読し感銘を受けた。この本は三松正夫記念館で販売されているので、内容に興味のある方は原本をご購読願いたい（1,300 円）。

尚、三松正夫と言う偉人の存在は、今回の交流会で初めて知ったので、D さんの言葉を借りて少し解説させて頂く。

「昭和新山」は昭和 18 年 12 月末から約 2 年間 17 回大爆発によって有珠山山麓に広がる麦畑を推上誕生した有珠山の寄生火山であるが、三松正夫は昭和新山の生成プロセスを克明に観察記録し、後に昭和新山の自然を守るため私財を投じて新山を買い取った方である。

昭和新山誕生当時、壮瞥郵便局長であった三松は、有珠山噴火の関係で明治時代当地を訪れた地震学の権威・大森房吉に会っているし、昭和新山の関係では地震学者・今村明恒から一編の漢詩を贈られている。今村博士が作詞した漢詩（意：胆振の国、有珠山の麓に龍が舞うが如くに、世にも珍しい新しい山ができた・・・）は、今村博士の筆になる書（書の達人かと思わせる迫力を感じる書である）として三松正夫記念館に掲げられている。

絵の素養があった三松が描いた昭和新山生成の数々の火山画も展示されているが、噴火を現地で見た人でないと描けない迫力がある。

（b）絵：この本には D さんが描いた約 100 枚の水彩画が収録されているが、安野光雅画伯の画風に似ており、「詩情あふれる優しい色合い」（p.167 より引用）、ほのぼのと心温まる絵が多い。D さんの画才レベルはプロ級と思う。この本は水彩画のテキストブックになるくらいの価値があると感じている。

（c）詩：【春遠からじ】（p.163）と言う項で、D さんが横浜在住の頃（春たけなわの時期に）、富士山麓（富士吉田経由）の御坂、一宮へ桃の花を見に行ったとの記述がある。
その中で、イングランドのロマン派詩人・ﾊﾟｰｼｰ･ﾋﾞｯｼｭ･シェリー（Percyy Bysshe Shelley）の詩「西風の賦」（Ode to the West Wind）の事が書いてあり、この詩の末句に
“If Winter comes, can Spring be far behind”（冬来たりなば 春遠からじ）の紹介がある。
この詩は忘れもしない私（山田）の愛唱詩であるので、こんな所で出会うとは驚いた。この詩は、

『 Oh wild west Wind，thou breath of Autumn’s being，
Thou，from whose Unseen presence the leaves dead，
Are driven，like ghosts from an enchanter fleeing･･･』
『おお、荒々しい西風よ、汝、秋の存在の息吹よ、
汝、その目に見えない存在から葉は死んだ、
追い込まれ、逃げる魔術師から幽霊のように･･･』

で始まる自然の荒々しさ、恐ろしさから始まっているが、小生の若い頃（20 才前後）の生活の厳しさや苦学と重なり、強く共感、愛唱してきた詩であったので、この様な形で（D さんの著書の中で）遭遇したのには驚いた。

更に岡田弘先生によって、この詩について下記の解説がなされている事に 2 度驚いた。
岡田先生の解説を転記すると、

『シェリーがこの詩を発表した頃は、1815 年のインドネシアのタンボラ火山の巨大噴火の全地球的な影響のため“火山の冬 vlocanic winter”を迎え、1816 年は“夏のない年”

となり、北ヨーロッパや米国北部からカナダにかけて冷害と不作が襲い、病気も蔓延し、洪水が多発した時代であった。このような時代背景の中で、このフレーズは誕生した』

困難な時代に、希望と光を与えるフレーズで締めくくっている長い詩であるが、岡田先生やＤさんの解説によって作詩の背景がよく理解でき、益々この詩が好きになった。

⑸Ｅさん：

京都市出身、陸上自衛隊北部方面航空隊を定年退官。1977 年噴火時、在職中航空活動をもって支援、1997 年洞爺湖町に移住。2000 年噴火時には整体治療ボランティアとして避難所を回る。2001 年より有珠山ガイドの会にて活動開始。避難所体験を通して学習した火山活動や避難生活の厳しさの紹介とともに、この地域の魅力など、大地の変動と共に共生する日常を、訪問客や児童生徒に対して指針を示しながらガイド活動や講話を実施中。

⑹Ｆさん：

北海道深川市出身、壮瞥町在住。1977 年の噴火や、大学での地学講座で有珠山や昭和新山に興味を持つ。英会話講師を経て、結婚を機に壮瞥町民となり 2000 年噴火を体験。温泉旅館を営む（女将）中で 2009 年女性第１号のマイスターとなり、火山活動の恐さと、洞爺湖や有珠山の美しさ、自然の素晴らしさを伝える活動を行っている。
現在、洞爺湖有珠火山マイスターの会の事務局長である。

⑺Ｇさん：

北海道登別市生まれ、上川町育ち。伊丹市で阪神淡路大震災を経験。札幌市では通信会社コールセンターの育成担当。2014 年豊浦町在住の夫と結婚を機に移住。北海道観光マスター、温泉ソムリエを取得。2019 年火山マイスターとして有珠山周辺でガイド活動を開始。
NPO 法人 森・水・人ネット理事。自然観察会や自然についての座学を企画、実施。洞爺湖有珠山ジオパークの魅力を地域内外に発信中。

⑻Ｈさん：

岩手県出身、伊達市在住。大学時代に地質学を学ぶ。北海道公立小中学校事務職員。2000 年伊達市勤務校にて噴火を経験。パソコン、IT 分野の講師。2010 年火山マイスターとして活動を開始。2016 年「北海道教育実践表彰」、2017 年「文部科学大臣優秀教職員表彰」
事務処理能力が並外れて優れていると聞く。

⑼Ｉさん：

静岡県出身、2017 年から「火山マイスター養成講座（フイールド）」受講をはじめ、オンライン講座、認定審査自主勉強会、ジオパーク有珠山学習会等に参加。
現在、洞爺湖有珠火山マイスター（2011/11 認定）。2021 年洞爺湖の魅力に惚れ込んで洞爺湖町に移住、洞爺湖町役場に就職。写真撮影が趣味。

§５．『昭和新山』～その誕生と観察の記録～について

北海道から帰阪後、昭和新山に興味を持ったので、三松正夫の著書『昭和新山』と新田次郎著『昭和新山』を読んでみた。三松正夫の本の裏表紙に要約的な文章があったので若干追加修正して「　」に転記する：

「 第二次大戦も末期の昭和 19 年頃(～20 年にかけて)北海道の洞爺湖のほとりの静かな村の畑のなかから、突如として大爆発が 17 回起こり、海抜 407m の山が盛り上がってきた。
これが『昭和新山』の誕生だった。人々が生活している目の前で新しい火山が出現したことは前代未聞の事であり、造化の神のいたずらでもありましょうか。著者はその千載一遇の機会にめぐり合わせたのである。
折からの物質不足、報道管制、専門学者の不在などの悪条件のもとで、著者はひたすら観察・記録を続けた。皿と豆の頻度計で地震観測。テグス糸を張り、板の上に顎を固定する独特の装置で、日々成長し変化していく昭和新山の姿の克明精緻なスケッチ等々。時には活動中の火山を探査中に九死に一生の目にも会った。こうした苦労がのちに、専門学者からも賞賛された＜ミマツダイヤグラム＞を生んだ。著者はまた、昭和新山が心無い人達に荒らされるのを見るに忍びず、全財産を投げうって全山を買い取り保護に努めた。
本書は、この昭和新山誕生と観察の記録であるが、単なる記録に留まらず、火山活動の全貌を見届けた世界的にも珍しい貴重な資料であり、また、科学する心を学び、自然保護の大切さ教えてくれる読み物として、さらに感動的な人間記録としても類まれな読み物である 」

又、著者 三松正夫が書いた昭和新山の『まえがき』を下記に転記する。
『 昭和新山と私。本来ならば、北海道の片田舎の 1 郵便局長と言うことで終わったであろう私の後半生が、すっかり変わってしまった。もちろんこの山を愛し、我が子にしたばっかりに蒙った苦労は並大抵のものではなかった。しかし、この山は、山と一心同体となった私に「昭和新山のミマツ」という名声を持って酬いてくれたし、山を通して全国津々浦々に、そして世界各国に多くの友人を与えてくれた。このことは何物にも代えがたい、山なくして得られなかったことであろう。
昭和 43 年暮れ、雪に埋もれた私の家に東京から電話が入った。吉川英治賞に内定したから受けて頂けるか、との連絡であった。私は作家でも何でもない。何かの間違いでは、と半信半疑であった。お恥ずかしいことに、吉川英治賞というのは何かの文学賞かと思ったのである。
私のこれまでの仕事は、すでに専門の諸先生方の素材となり、血となり肉となって、数々の立派な論文に生かして頂いている。が私の著作と言えば、『昭和新山生成日記』だけである。この本が受賞の対象になったのである。この本は一生の仕事を集大成する意味で、昭和 37 年、万国火山会議の分科会の一行が昭和新山に来訪されるのを契機に自費出版したものである。
昭和 44 年春、桜の東京へ、晴れの受賞式に出席すべく出向いた。そしてこの賞が故吉川氏のご遺志を生かした、誠に身に余る光栄のものであるということを、しみじみと味わったのであった。そしてこの栄誉に酬いるためには、私の仕事をより多くの人に知ってもらうことだと考えた。
また、私自身の生命は無限のものではない。これまでに、ずいぶん多くの人に山の事を話してきたが、それはその人との対話の範囲だけで、あとには残らない。色々の事を早い機会に書き残さなければならない。昭和新山の誕生を見届けた以上、この体験を後世に残す義務もあろう。
『昭和新山生成日記』はすでに絶版となっている。貴宅早々、意を決してペンをとったのである。
悲しいかな、82 才という年齢には勝てない。ともすれば途絶えがちなペンの進みを、いつも励まし、原稿の整理をしてくれた家族、そして私の意をくんで、この書を世に送って下さった講談社の方々に厚くお礼を申し上げたい。
この書を脱稿できたことで、私の人生において果たさなければと、思いつめていた事の一つの肩の荷がおりたようだ。 今日の北国の空は、日本晴れだ。昭和新山の噴煙もうすい。
昭和 45 年 盛夏 壮瞥で 三松正夫 』

§６．おわりに：

私のゴルフ仲間（毎月 2 回程度一緒にラウンドしている）に村田和雄さんと言う 89 才の友人が居る（元ユアサコーポレーション専務）。村田さんは本業で多くの成果をあげた方であるが、年齢が 70 才の時、ヨットで太平洋を単独横断した冒険家でもある。堀江謙一が太平洋単独横断に成功したのは 23 才の時である。村田さんは若気の至りで行ったのではなく、村田さんの周到な計画性と強靭な精神力が想像できる。

村田さんは帰国後のインタビューの中で母校（横浜国立大学）の石碑「名教自然」を引用して、その意味を「すべてのことは自然の中にある。だから自然を教師として自然の中に答えを見出せ」「人間が考えることは、自然からは一歩も出ることはできない」と解釈している。この言葉は太平洋で 96 日間、孤独と恐怖に晒される挑戦を決意した基本的な考え方であったのであろう。又、自然の畏怖を体感した舟旅になったのであろうと思う。

洞爺湖有珠火山マイスター活動も自然を学び、自然の中に答えを見出す活動であり、「名教自然」と共通する考え方ではないかと思い、村田さんの言葉を紹介させて頂いた次第である。

最後に、この様な作文作成のきっかけを作って下さった皆様に心から感謝申し上げます。以上

【引用＆参考文献】

池田武史著『また、春を待つ』2024 年 11 月 30 日発行
洞爺湖有珠火山マイスターパンフレット
三松正夫著『昭和新山』昭和 45 年 11 月 20 日発行
新田次郎著『昭和新山』文春文庫
洞爺湖有珠火山マイスターネットワーク（https://volcano-meister.jp/）、
阿武山地震・防災サイエンスミュージアム（https://www.npo-abuyama.org/）